

## 初期仏典にみられる六人の自由思想家の所説について (1)

仲宗根 充修

「沙門果経」をはじめとして、初期仏典にはブッダと同時代に活躍した六人の自由思想家（仏典では「六師外道」と称される）にかんする記述がみられる。本稿では、諸部派に伝承される「沙門果経」類、及びこれを引用する文献を比較することによって、特に説一切有部に伝承される六人の自由思想家、なかでもプーラナ・カーシャパの所説について考察する。

キーワード：初期仏典、沙門果経、説一切有部、六師外道、プーラナ・カーシャパ

### 1. はじめに

初期仏典にはブッダと同時代に活躍した六人の自由思想家にかんする伝承がみられる。本稿で取りあげるプーラナ・カーシャパ（Pūraṇa Kāśyapa）は、パーリ注釈書では、プーラナ・カッサパ（Pūraṇa Kassapa）という名で、奴隸階級の出身であり、「無作用論」（akiriya-vāda）、すなわち善悪の行為とその報いとしての結果を認めない立場にあったとされている<sup>1)</sup>。一方、『法句譬喻経』では「富蘭迦葉」という名の婆羅門として登場する<sup>2)</sup>。

また、説一切有部の文献中にみられるプーラナ・カーシャパの所説は、パーリ文献中ではアジタ・ケーサカンバリンの所説として伝承されているなど、諸部派の文献を比較すれば説者や所説に相異がみられる<sup>3)</sup>。本稿では説一切有部の文献中にみられるプーラナ・カーシャパの所説およびこれと同内容の所説をあげて、それらを比較・考察してみたい。主な該当文献、及びその所属部派については表1の通りである。

### 2. 「沙門果経」類および同内容の所説

「沙門果経」類および同内容の所説 (1) ～ (10) にみられるプーラナ・カーシャパ（パーリ文献

ではアジタ・ケーサカンバリン）の所説を以下にあげる。

(1) SPS（説者：Ajita Kesakambalin）DN I, p. 55<sup>15-31</sup>;

(2) MN 60 Apaṇṇakasutta（説者：不明）MN I, p. 402<sup>10-15</sup>; 下線部 (A) ～ (L) に相当。

(3) MN 76 Sandakasutta（説者：不明）MN I, p. 515<sup>4-18</sup>;

(4) SN XXIV 5 Natthi（説者：不明）SN III, pp. 206<sup>28</sup>-207<sup>10</sup>;

(5) SN XLII 13 Pātali or Manāpo（説者：不明）SN IV, p. 348<sup>24-30</sup>; 下線部 (A) ～ (L) に相当。

(A) N' atthi ... dinnam (B) n' atthi yittham  
(C) n' atthi hutam, (F) n' atthi sukaṭa-  
dukkatāṇam kammāṇam phalaṃ vipāko, (G)  
n' atthi ayaṃ loko (H) n' atthi paro loko, (I)  
n' atthi mātā (J) n' atthi pitā, (K) n' atthi  
sattā-opapātikā, (L) n' atthi loka samaṇa-  
brāhmaṇā sammaggaṭā sammā-paṭipannā ye  
imaṇ ca lokam paraṇ ca lokam sayam abhiññā  
sacchikatvā pavedenti.

(N) Cātum-mahābhūṭiko ayaṃ puriso, yadā  
kālaṃ karoti paṭhavī paṭhavi-kāyaṃ anupeti  
anupagacchati, āpo āpo-kāyaṃ anupeti

表1 「沙門果経」類および同内容の所説、ならびにその所属部派

「沙門果経」類および同内容の所説	所属部派
(1) Dīgha-Nikāya (DN) 2 Sāmaññaphalasutta (SPS)	上座部大寺派
(2) Majjhima-Nikāya (MN) 60 Apanṇakasutta	上座部大寺派
(3) Majjhima-Nikāya (MN) 76 Sandakasutta	上座部大寺派
(4) Saṃyutta-Nikāya (SN) XXIV 5 Natthi	上座部大寺派
(5) Saṃyutta-Nikāya (SN) XLII 13 Pātali or Manāpo	上座部大寺派
(6) 『長阿含経』(T. no. 1)	法蔵部
(7) 『寂志果経』(T. no. 22)	不明
(8) 『中阿含経』(T. no. 26)	説一切有部
(9) 『雑阿含経』(T. no. 99)	説一切有部
(10) 『増一阿含経』(T. no. 125)	不明
律に引用される「沙門果経」	所属部派
(11) Saṅghabhedavastu (SBV)	説一切有部
(12) 『根本説一切有部毘奈耶出家事』(T. no. 1444)	説一切有部
(13) 『根本説一切有部毘奈耶』(T. no. 1442)	説一切有部
論に引用される「沙門果経」	所属部派
(14) 『発智論』(T. no. 1544)	説一切有部
(15) 『阿毘達磨大毘婆沙論』(T. no. 1545)	説一切有部
(16) Abhidharmakośabhāṣya (AKBh)	説一切有部
注釈書に引用される「沙門果経」	所属部派
(17) Vinayavastuṭīkā (VVṬ) ('Dul ba gzhi rgya cher 'grel pa)	説一切有部

anupagacchati, tejo tejo-kāyaṃ anupeti  
 anupagacchati, vāyo vāyo-kāyaṃ anupeti  
 anupagacchati, ākāsaṃ indriyāni saṃkamanti.  
 (O) Āsandipañcamā purisā matam ādāya  
 gacchanti, (P) yāva ālāhanā padāni  
 paññāpentī, (Q) (R) kāpotakāni atthīni  
 bhavanti, Bhassantāhutiyo. (S) Dattu-  
 paññattam yad idaṃ dānam, (T) tesam  
 tucchaṃ musā vilāpo ye keci atthika-vādam  
 vadanti. (U) Bāle ca paṇḍite ca kāyassa bhedā  
 ucchijjanti vinassanti, na honti param maraṇā  
 ti.<sup>4)</sup>

(A) 布施されるものはない。(B) 献供される  
 ものはない。(C) 供養されるものはない。(F)  
 善行・悪行の業に対する果報や異熟はない。  
 (G) この世はない。(H) あの世はない。(I)

母はない。(J) 父はない。(K) 化生の有情は  
 ない。(L) この世とあの世とを自ら通達し、目  
 の当たりにして、説くような、正しく歩み、正  
 しく修行している沙門・バラモンたちは世に  
 いない。

(N) 四大元素より成るこの人間が死ぬるときに  
 は、地は地界に入り込み、水は水界に入り込  
 み、火は火界に入り込み、風は風界に入り込  
 み、諸の感覚器官は虚空に移る。(O) 担架を  
 第五とする〔四人の〕男たちが死者を選び、  
 (P) 火葬場まで〔死者に関する〕諸句が知ら  
 れる。(Q) (R) 鳩色の骨と、灰となって終わ  
 る供儀がある。(S) この布施というものは、愚  
 者による仮説である。(T) 誰であれ実在論を  
 唱える者には、空言や妄語がある。(U) 愚者  
 も賢者も身体が壊れた後は、断滅し、滅亡し、

死後には存在しない。

(6)『長阿含経』『沙門果経』

①(説者:末伽梨拘舍梨) T. no. 1 (27), 108b13-18:

(A) (B) (C) 無施無與無祭祀法。 (F) 亦無善惡無善惡報。 (G) 無有今世。 (H) 亦無後世。 (J) 無父 (I) 無母。 (K) 無天無化無衆生。 (L) 世無沙門婆羅門平等行者。 亦無今世後世自身作證布現他人。 (T) 諸言有者。皆是虚妄。

②(説者:阿夷陀翅舍欽婆羅) T. no. 1 (27), 108b26-c1:

(N) 受四大人取命終者。地大還歸地。水還歸水。火還歸火。風還歸風。皆悉壞敗諸根歸空。 (O) 若人死時牀輿舉身置於塚間。 (P) (Q) (R) 火燒其骨如鴿色。或變爲灰土。 (U) 若愚若智取命終者。皆悉壞敗爲斷滅法。

(7)『寂志果経』(説者:不蘭迦葉) T. no. 22, 271b25- c2:

無有是也。亦無世尊。無答善恩。亦無罪福。無有父母。亦無羅漢得道之人。供養無福。亦無今世後世。亦無專行一心道志。於是雖有身命。壽終之後。四事散壞。心滅歸無。後不復生。雖葬土藏。各自腐敗。悉盡如空。無所復有。

(8)『中阿含経』(説者:不明) T. no. 26, 437c28-438a2:

(A) (B) (C) 無施無齋無有呪説。 (D) (E) 無善惡業。 (F) 無善惡業報。 (G) (H) 無此世彼世。 (J) (I) 無父無母。 (L) 世無真人往至善處善去善向。此世彼世。自知自覺自作證成就遊。

(9)『雜阿含経』

①卷第七(説者:不明): T. no. 99 (154), 43c24-28:

(A) (B) (C) 無施無會無説。 (F) 無善趣惡趣業報。 (G) (H) 無此世他世。 (I) 無母 (J) 無父 (K) 無衆生 (L) 無世間阿羅漢正到正趣。 若此世他世見法自知身作證具足住。我生已盡。梵行已立。所作已作。自知不受後有。

②卷第七(説者:不明): T. no. 99 (156), 44a14-20:

(M) 諸衆生此世活。死後斷壞無所有。 (N) 四大和合士夫。身命終時。地歸地。水歸水。火歸火。風歸風。根隨空轉。 (O) 輿床第五。四人持死人往塚間。 (P) (R) 乃至未燒可知燒然已骨白鴿色立。 (S) 高慢者知施。黠慧者知受。 (T) 若説有者。彼一切虚誑妄説。 (U) 若愚若智。死後他世。俱斷壞無所有。

③卷第三十七(説者:不明): T. no. 99 (1039), 271c12-16:

(A) (B) (C) 無施無報無福。 (D) (E) 無善行惡行。 (F) 無善惡業果報。 (G) 無此世。 (H) 無他世。 (J) (I) 無父母。 (K) 無衆生生世間。 (L) 無世阿羅漢等趣等向。此世他世。自知作證。我生已盡。梵行已立。所作已作。自知不受後有。

(10)『増一阿含経』

①卷第三十二(説者:阿夷耑): T. no. 125, 727c17-19:

無施無受亦無與者。亦無今世後世。衆生之類亦無善惡之報。

②卷第三十九(説者:不蘭迦葉): T. no. 125, 763b4-5:

無福無施。無今世後世善惡之報。世無阿羅漢等成就者。

ここで、上座部大寺派所属の(1)SPS、法藏部所属の(6)『長阿含経』『沙門果経』、説一切有部所属の(8)『中阿含経』(9)『雜阿含経』に

おける (A) ~ (U) の対応文を比較すると、(D) (E) の文が (8) と (9) ③に共通してみられ、(L) の中でも「我生已盡。梵行已立。所作已作。自知不受後有」の文、また (S) の中でも「黠慧者知受」の文が (9) にみられる。

### 3. 律に引用される「沙門果経」

次に、律（いずれも説一切有部所属）に引用される「沙門果経」のプーラナ・カーシャパの所説を以下にあげる。

(11) SBV（説者：Pūraṇa Kāśyapa）：

(A) nāsti dattam; (B) nāsti iṣṭam; (C) nāsti hutam; (D) nāsti sucaritam; (E) <nāsti duṣcaritam>; (F) nāsti sucaritaduṣcaritānām karmaṇām phalavipākāḥ; (G) nasty ayaṃ lokāḥ; (H) nāsti paralokāḥ; (I) nāsti mātā; (J) nāsti pitā; (K) nāsti satva upapādukaḥ; (L) na santi loke arhantaḥ samyaggaṭāḥ samyakpratipannāḥ, ye imaṃ ca lokam param ca lokam drṣṭa eva dharme svayam abhijñayā sākṣātkṛtvā upasampadya pravedayante: kṣiṇā me jātiḥ, uṣitam brahmacaryam, kṛtam karaṇīyam, nāparam asmāt bhavam prajānīmaḥ iti;

(M) ihaiva jīvo jīvati; sa pretyocchidyate: vinaśyati; na bhavati param maraṇāt; (N) cāturmahābhautikāḥ puruṣasya samucchrayaḥ yasmin samaye kālaṃ karoti, tasya prthivyām prthivīkāyaḥ; upaiti; apsu apkāyaḥ; tejasi tejahkāyaḥ; vāyau vāyukāyaḥ; ākāśe indriyāṇy anuparivartante; (O) āsandīpañcamāḥ puruṣāḥ puruṣam ādāya śmaśānam anuvrajanti; (P) ādahanāt param <na> prajñāyate; (Q) bhaṣmībhavanti āhutaḥ; (R) kapotavarṇāny asthīny avatiṣṭhante iti; (S) dr̥ptopajñātām dānam; paṇḍitopajñātāḥ parigrahaḥ; (T) tatra

ye astivādinaḥ sarve te riktam, tuccham, mṛṣā pralapanti iti; (U) bālaś ca paṇḍitaś ca ubhāv apy etau pretya ucchidyete, vinaśyataḥ, na bhavataḥ param maraṇāt.<sup>5)</sup>

(A) 布施されるものはない。(B) 献供されるものはない。(C) 供養されるものはない。(D) 善行はない。(E) 悪行はない。(F) 善行・悪行の果報や異熟はない。(G) この世はない。(H) あの世はない。(I) 母はない。(J) 父はない。(K) 化生の有情はない。(L) この世とあの世とを自らの神通力によって現世において目の当たりにし、通達し、「わが生は尽きた。梵行はすでに完成した。なすべきことはなされた。これ以後われわれは生存を受けることはない」と知って、正しく歩み、正しく修行している阿羅漢たちは世にない。

(M) 生命はこの世においてのみ生存し、それは死後に断滅し、滅亡し、死後には存在しない。(N) 四大元素から成る人間が死ぬときには、地の集合体は地に、水の集合体は水に、火の集合体は火に、風の集合体は風に入り込み、諸の感覚器官は虚空に帰る。(O) 担架を第五とする〔四人の〕男たちは〔死〕人を運び、火葬場に送る。(P) 火葬の後には知られない。(Q) 諸の供物は灰となる。(R) 鳩色の骨が残る。(S) 布施は狂人によって考案されたものであり、受納は賢者によって考案されたものである。(T) ここにおいて実在論者はすべて、無益で空虚なことを偽って語っている。(U) 愚者も賢者も、これら両者ともに、死して断たれ滅びるのであって、死後には存在しない。

(12)『出家事』（説者：脯刺拏）T. no. 1444, 1025a-15:

(A) (B) (C) 無與。無愛。無見。無祭祀。(D) 無善行。(E) 無悪行。(F) 無善惡業報異熟果。

(G) 無今世。(H) 無後世。(J) 無父。(I) 無母。(K) 無化生有情。(L) 世間無阿羅漢。正行正成就。若見此世後世者。於此自法。證明神通。説得圓成。我生已盡。梵行已立。所作已辦。不受後有。(M) 唯受此生。斷後世有。命終即壞。(N) 四大共成。假爲人身。是命斷時。四大各歸本處。第五空界。諸根即轉。(O) 將此死屍。於林間焚燒。(P) (Q) (R) 既變爲灰。骸骨鴿色。即無人也。乃知了已。(S) (T) 智者行施及受施者。所是説有之人。悉空妄説。虚叫之言。並皆愚夫。(U) 若是智者。了俱斷壞。知無後身。<sup>6)</sup>

(13)『毘奈耶』(説者：瞢刺拏迦攝波) T. no. 1442, 692c6-17:

(A) (B) (C) 無施無受亦無祠祀。(D) (E) 無善惡行 (F) 無業因緣無異熟果。(G) (H) 無今世無後世。(J) (I) 無父無母。(K) 亦無化生有情於此世間。(L) 無阿羅漢正趣正行。此世他世於現法中得自覺悟。正證圓滿皆悉了知。我生已盡。梵行已立。所作已辦。不受後有。(M) 此事皆無於此有命。名之爲生。(N) 此身謝已五大分離更無生理。名之爲死。地歸於地。水歸於水。火歸於火。風歸於風。諸根歸空。(O) 四人興至焚燒之處。(P) (R) 以火燒訖。但有殘骨更無所知。(U) 愚智同此。(S) 與者名施。取者名受。(T) 諸説有者皆是虚妄。<sup>7)</sup>

(11) (12) (13) のいずれにも、(D) (E) の文、また (L) の中でも「わが生は尽きた。梵行はすでに完成した。なすべきことはなされた。これ以後われわれは生存を受けることはない」の文、(S) の中でも「受納は賢者によって考案されたものである」の文が共通してみられる。

#### 4. 論に引用される「沙門果経」

次に、論（いずれも説一切有部所属）に引用される「沙門果経」のプーラナ・カーシャパの所説を以下にあげる。

(14)『發智論』T. no. 1544, 1027b17-c03:

(15)『阿毘達磨大毘婆沙論』(説者：補刺拏<sup>8)</sup>) T. no. 1545, 987c15-989b16:

(A) 無施與。(B) 無愛樂。(C) 無祠祀。(D) (E) 無妙行惡行。… (F) 無妙行惡行果。<sup>9)</sup> (G) 無此世。(H) 無他世。(K) 無化生有情。… (J) 無父。(I) 無母。… (L) 世間無阿羅漢。… 無正至。… 無正行此世他世。即於現法。知自通達。作證具足住。我生已盡。梵行已立。所作已辦。不受後有。如實知。… (M) 乃至活有命者。死已斷壞無有。(N) 此四大種。士夫身… 死時。地身歸地。水身歸水。火身歸火。風身歸風。根隨空轉。… (O) 興爲第五。持彼死屍。往棄塚間。… (P) (Q) 未燒差別可見燒已成灰。(R) 餘鴿色骨。(S) 愚者讚施。智者讚受。(T) 諸有論者。一切空虚妄語。(U) 乃至活有。愚智者死已。斷壞無有。<sup>10)</sup>

(16) AKBh: Pradhan (1967: 247<sup>22-24</sup>), Shastri (1971: 694<sup>13-14</sup>) :

“(A) nāsti dattam (B) nāstīṣṭam (C) nāsti hutam (D) nāsti sucaritam (E) nāsti duṣcaritam ity evam ādi yāvan (L) na santi loke 'rhanta' iti.”<sup>11)</sup>

(A) 「布施されるものはない。(B) 献供されるものはない。(C) 供養されるものはない。(D) 善行はない。(E) 悪行はない。云々乃至 (L) 阿羅漢たちは世にない。」というようにである。

(14) (15) (16) のいずれにも (D) (E) の文、(14) (15) には (L) の中でも「我生已盡。梵行

已立。所作已辦。不受後有」の文、(S) の中でも「受納は賢者によって考案されたものである」の文がみられる。

## 5. 注釈書に引用される「沙門果経」

Vinayavastuṭkā (VVT) は『根本説一切有部毘奈耶出家事』に対する Kalyānamitra による注釈書であるが、ここに引用される「沙門果経」のプーラナ・カーシャパの所説を以下にあげる。

(17) VVT (P: no. 5615 (Dzu) 216b1-221b5; D: no. 4113 (Tsu) 196b6-201a2) :

(A) sbyin pa med do || (B) mchod sbyin med do || (C) sbyin sreg med do || (D) legs par spyad pa med do || (E) nyes par spyad pa med do ||<sup>1</sup> ... (F) legs par spyad pa dang nyes par spyad pa'i las rnams kyi<sup>2</sup> 'bras bu dang rnam par smin pa med do ... || ... (G) 'jig rten 'di med do || (H) 'jig rten pha rol med do || (I) ma med do || (J) pha med do || (K) sems can rdzus<sup>3</sup> te skye ba med do ||<sup>4</sup> ... (L) 'jig rten na dgra bcom pa yang dag par rtogs pa yang dag par bsgrub<sup>5</sup> pa gang dag tshe 'di la rang gi mngon par shes pas 'jig rten 'di dang | 'jig rten pha rol mngon sum du byas nas bsgrubs te | bdag cag ni skye ba zad do || tshangs par spyad pa bsten to || bya ba byas so || srid pa 'di las gzhan mi shes so ||<sup>6</sup> zhes go bar byed pa dag med do || ... (M) srog ni 'di nyid la 'tsho zhing de physis chad par 'gyur zhig par 'gyur te | shi ba'i 'og tu mi 'byung ngo ... || ... (N) skyes bu'i lus ni 'byung ba chen po bzhi las gyur pa<sup>7</sup> yin te | de ni gang gi tshe dus byed pa ni<sup>8</sup> de'i sa'i lus ni sa'i bag la zha | chu'i lus ni chu'i | me'i lus ni me'i | rlung gi lus ni rlung gi bag la zha

bar 'gyur ro || dbang po rnams ni nam mkha'i rjes su 'gro bar 'gyur ro || (O) skyes bu'i ro ni khri dang lnga'i mi dag gis khyer te | dur khrod du 'gro zhing (P) bsregs phan chad mi mngon par 'gyur ro || (Q) bsreg bya dag ni thal bar 'gyur ro || (R) rus pa dag ni thi ba'i mdog 'dra bar gnas so ||<sup>9</sup> ... (S) di ltar rmongs pa nye bar bstan pa ni sbyin pa<sup>10</sup> la mkhas pa nye bar bstan pa ni legs so ... || ... (T) de la gang dag yod par smra ba de dag thams cad ni gsob ||<sup>11</sup> gsog brdzun<sup>12</sup> du smra ba dag yin no ||<sup>13</sup> ... (U) 'di ltar byis pa dang mkhas pa de nyid<sup>14</sup> ni physis chad par 'gyur zhig par 'gyur te | shi ba'i 'og tu mi 'byung ngo ||<sup>15</sup>

1. D: zhes ... ||. 2. P: kyis. 3. P: brdzus. 4. D: zhes ... ||. 5. P: sgrub. 6. D omits ||. 7. P: 'gyur ba. 8. P omits ni. 9. D: zhes ... ||. 10. P omits pa. 11. D omits |. 12. P: rdzun. 13. D: zhes ... |. 14. P: gnyis. 15. D: zhes ... |.

VVT の「沙門果経」は、説一切有部の「沙門果経」類のなかでも、(9)『雑阿含経』や(11)SBV のものとよく一致するが、VVT は自由思想家(プーラナ・カーシャパ)が自らの説を主張するにあたって、その根拠とする見解を紹介するために、『婆沙論』を依用している。

VVT (P no. 5615 (Dzu) 217b1-5; D no. 4113 (Tsu) 197b3-6) :

... (a) kha cig srog gcod kyang tshe ring ba dang | (b) ma byin par<sup>1</sup> len kyang longs spyod che ba dang | (c) gzhan la gnod pa byed kyang nad nyung bar mthong la | (d) kha cig srog mi gcod kyang tshe thung ba dang | (e) ma byin par mi len kyang longs spyod chung ba dang | (f) gzhan la gnod pa mi byed kyang



nad mang bar mthong nas de dag 'di snyam  
du sems te | (g) gal te legs par spyad pa  
dang<sup>2</sup> nyes par spyad pa'i las rnams kyi<sup>3</sup>  
'bras bu dang | rnam par smin pa yod par  
gyur na (h) srog gcod pa ni tshe thung ba  
dang | (i) ma byin par len pa ni longs spyod  
chung ba dang | (j) gzhan la gnod par byed  
pa ni nad mang bar 'gyur zhing | (k) srog mi  
gcod pa ni tshe ring ba dang | (l) ma byin  
par<sup>4</sup> mi len pa'i longs spyod che ba dang |  
(m) gzhan la gnod pa mi byed pa ni nad  
nyung bar 'gyur ba'i rigs na de lta ma yin te  
| (n) log par snang bas de'i phyir (o) legs  
par spyad pa dang | nyes par spyad pa'i las  
kyi 'bras bu dang | rnam par smin pa med do  
zhes de dag de lta lta zhing de skad smras  
so<sup>5</sup> ||

1. P: pa. 2. P: dang |. 3. P: kyi. 4. P: pa ni. 5. P: sma o.

… (a) ある人は殺生するけれども長寿 (b) 盗むけれども大財 (c) 他者に害を加えるけれども少病と見て、 (d) ある人は殺生しないけれども短命 (e) 盗まないけれども小財 (f) 他者に害を加えないけれども多病と見てのち、彼らは次のように思って、 (g) 「もし妙行と悪行の諸業の果と異熟があったとするならば、 (h) 殺生は短命 (i) 盗みは小財 (j) 他者に害を加えることは多病になり、かつ (k) 不殺生は長寿 (l) 不盗は大財 (m) 他者に害を加えないことは少病になるという道理であればいいが、その見解ではないのであって、 (n) 違った現象の故に、 (o) 妙行と悪行の諸業の果と異熟はない」と、彼らはそのように見つ、そのように言うのである。

(a) 有諸外道現見世間有殺生長壽 (d) 離殺短壽。 (b) 有盜豐財 (e) 離盜乏財。… (c) 有損惱他無病安樂。 (f) 有不惱他而多疾苦。見如是等相違事已便作是念。無施與無愛樂乃至無妙行惡行果。 (g) 若有者 (h) 則應殺生一切短壽。 (i) (j) (k) (l) (m) 乃至不惱他者無病安樂。 (n) 現見相違故 (o) 知決定無施與乃至廣說。

以上のように、(a)～(o) の文が対応していることから、VVT は自由思想家（プーラナ・カーシャパ）の説の根拠となる見解を紹介するために、『婆沙論』を依用している。

## 6. おわりに

他部派の「沙門果経」と比較して、説一切有部の「沙門果経」には、「善行はない」「悪行はない」「わが生は尽きた。梵行はすでに完成した。なすべきことはなされた。これ以後われわれは生存を受けることはない」「受納は賢者によって考案されたものである」などの文が特徴的にみられることがわかった。

また、VVT は自由思想家（プーラナ・カーシャパ）の説の根拠となる見解を紹介するために、『婆沙論』を依用していることから、これまで主に現存漢訳からしか知られなかった『婆沙論』の一部をチベット語で回収できることなどがわかった。

## 略号

D = Derge/sDe dge edition

P = Peking edition

T = 大正新脩大藏経

パーリ語テキストについてはすべて Pali Text Society 版を使用。

『阿毘達磨大毘婆沙論』 T. 1545, 987c28-988a6:

## 注

- 1) Cf. Sumangaravirāsini I, pp. 142<sup>20</sup>-143<sup>2</sup>, Suttanipāta, p. 92<sup>1</sup>, Paramatthajotikā II, pp. 422<sup>29</sup>-423<sup>3</sup>, 村上・及川 (1988: 180, 219), 浪花 (1998: 287). Cf. DhammapadAṭṭhakathā III, pp. 208<sup>13</sup>-209<sup>4</sup>.
- 2) T. no. 211, 598c1-599c18. Cf. 榎本他 (2001: 68-77).
- 3) Cf. 宇井 (1965: 351-356), 雲井 (1967: 104ff.).
- 4) Cf. Sumangaravirāsini I, pp. 165<sup>11</sup>-166<sup>16</sup>; Papañcasūdanī III, pp. 226<sup>22</sup>-228<sup>1</sup>; Sāratthappakāsinī II, pp. 338<sup>12</sup>-339<sup>14</sup>.
- 5) Gnoli (ed.) 1977-78, II, pp. 220<sup>26</sup>-221<sup>14</sup>. Cf. P no. 1030 (Ce) 240b4-241a1; D no. 1 (Nga) 261a6-b5. Cf. T. no. 1450, 205b26- c2. Cf. Wogihara (1990: 409<sup>19,23</sup>)
- 6) Cf. P no. 1030 (Khe) 23b8-24a6; D no. 1 (Ka) 23b6-24a5; Vogel (1970: 10-11).
- 7) Cf. P no. 1032 (Che) 235b8-236a7; D no. 3 (Ca) 256b4-257a3.
- 8) 『阿毘達磨大毘婆沙論』第二百卷に「補刺拏說無施與等。…乃至活有命者死後斷壞無有等…。…此四大種士夫身乃至智者讚受」(T. no. 1545, 1002b8-13) とある。
- 9) Cf. T. no. 1544, 954c9-10.
- 10) Cf. T. no. 1543, 913a16-b3.  
Cf. 『阿毘曇毘婆沙論』 T. no. 1546, 199b15-17: 無施無祠祀無善惡業果報無今世後世。…無父無母無化生衆生。…世無阿羅漢無趣正道。  
Cf. 『舍利弗阿毘曇論』 T. no. 1548, 700b2-4: 無施無祠祀無善惡業報無此世他世無父母無天無化生衆生無沙門婆羅門。  
Cf. 『尊婆須蜜菩薩所集論』 T. no. 1549, 792b17-28: …無施無受…。…無善行惡行…。…無今世無後世。亦無衆生類。…無有父母…。…世無阿羅漢修行道人。而無有道。…於此間有命活。後世更不復死。…是謂人有吾我身。彼若命終時。地身還歸地。水歸水。火歸火。風歸風。諸根歸虛空。…度世陰時不見歸來。於此間命活…。…處胎中。若胎中終。而觀其命彼亦見終始。於此間命活…。
- 11) Cf. P no. 5591 (Gu) 240b5-6; D no. 4090 (Ku) 207a3-4.  
Cf. 『阿毘達磨俱舍論』 T. no. 1558, 88b14-17: 無施與無愛樂無祠祀無妙行無惡行。無妙惡行業果異熟。無此世間無彼世間。無母無父。無化生有情。世間無沙門或婆羅門是阿羅漢。  
Cf. Abhidharmakośavyākhyā: Wogihara (1990:

409<sup>19,23</sup>), 舟橋 (2011: 362-363) : nāsti dattam. nāstīṣṭam. nāsti hutam. nāsti sucaritam. nāsti duṣcaritam. nāsti sucarita-duṣcaritānām karmaṇām phala-vipākaḥ. nāsty ayam lokah. nāsti paralokah. nāsti mātā. nāsti pitā. nāsti sattva upapādukaḥ. na saṃti loka 'rhamta iti.  
Cf. P no. 5593 (Chu) 66b3-4; D no. 4092 (Ngu) 59b6-60a1.

## 参考文献

- 紙面の都合上、一部をあげるにとどめる。
- Gnoli (ed.) 1977-78 *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu*, part I-II, Roma.
- P. Pradhan (ed.) 1967 *Abhidharma-kośa-bhāṣya of Vasubandhu*, Patna.
- S. D. Shastri (ed.) 1971 *Abhidharmakośa & bhāṣya of ācārya Vasubandhu with Sphuṭārthā Commentary of ācārya Yaśomitra*, Part I-II, Varanasi.
- C. Vogel 1970 *The Teachings of the Six Heretics According to the Pravrajyāvastu of the Tibetan Mūlasarvāstivāda Vinaya*, Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes, Band 39, Wiesbaden: Kommissionsverlag F. Steiner.
- U. Wogihara (ed.) 1990 *Sphuṭārthā Abhidharma-kośa-vyākhyā, the work of Yaśomitra*, the 3rd edition, Tokyo.
- 宇井伯寿 1965 『印度哲学研究 第二』 岩波書店
- 榎本文雄他 2001 『真理の偈と物語 (下) — 『法句譬喻經』現代語訳—』 大蔵出版
- 雲井昭善 1967 『仏教興起時代の思想研究』 平楽寺書店
- 高木神元 1973 「沙門果經にみられる六師外道と経作者の意図」 『仏教学会報』 第4, 5号合併号: 1-12
- 浪花宣明 1998 『サーラサンガハの研究: 仏教教理の精要』 平楽寺書店
- 舟橋一哉 2011 『俱舍論の原典解明—業品一』 (新装版) 法藏館
- 梵文仏典研究会 1994 「梵文『沙門果經』和訳 (1)」 『佛教大学仏教学会紀要』 2, 佛教大学仏教学会: 1-32
- 南清隆 1983 「パーリ『沙門果經』の六師外道について」 『印度学仏教学研究』 32-1: 158-159
- 南清隆 1985 「Sāmaññaphala-sutta 覚書」 『華頂短期大学研究紀要』 30: (21) - (32)
- 村上真完、及川真介 1988 『仏のことは註—パラマッタジョーティカー—』 3, 春秋社